

# 学級で心を育む「お絵かき遊び」(IV)

## — 養護教諭による試行の実際 —

佐田 和美<sup>1)</sup>・新谷りつ子<sup>2)</sup>・岡田 珠江<sup>3)</sup>

学級で教師が子どもの心を育むことを目指し、筆者らは、「お絵かき遊び」を開発し、実践を重ねている。

本稿においては、養護教諭が学級に出向き、定期的に継続し「お絵かき遊び」に取り組んだ実践例を報告する。学級担任でない養護教諭が「お絵かき遊び」を通し子どもたちとのかかわることで、個人や集団に表われる変化や、実施する時間の違いによって現れる「お絵かき遊び」への影響等を検証した。その結果、子どもにとって養護教諭や保健室の存在が心理的に近いものとなり、子どもの心の支援の可能性が広がった。「お絵かき遊び」は、子どもが自分の心を見つめるきっかけになり、教師にとって子ども理解を深めることができるなど、子ども・教師の双方にとって利点が多いものであった。

キーワード：「お絵かき遊び」・描画療法・養護教諭・学級担任

### I 問題意識

子どもをめぐる問題が後を絶たず、子どもの心の安定や問題行動の予防・早期発見が、重要な教育課題になっている。特に、小学校においてはスクールカウンセラーの配置も少ないため、養護教諭が児童の心理的支援について一役割を担っている。また筆者らは、学級において教師が子どもの心を育む手法として描画療法を応用した「お絵かき遊び」を開発し、その実践を重ねている（岡田・松本、2007）。年齢の低い子どもほど、言葉で自分の思いを表現することが難しいため、このような描画を用いた心理的支援が有効である。

健康教育の実践者である養護教諭は、心身ともに生涯を健康に生きることができる子どもを育てるため、保健室だけでなく、学校生活のさまざまな場面で子どもたちを知り、理解することが大切である。しかし、養護教諭が単発的に教室へ行き保健学習をするだけでは、子どもたちと深くかかわることが難しいため、継続的な取り組みを行うことが必要である。筆者らは、養護教諭が保健室で子どもとのかかわりをもつだけでなく、学級を対象に心を育むための取り組みを、積極的に行うことができれば、子どもたちにとって養護教諭が身近な存在になり、「お絵かき遊び」を通して子どもの心の健康にふれ、必要に応じた支援が受けやすくなる。また、小学校においては、学級担任以外の者が学級の子どものかかわることが少ないため、担任以外の教師に対する子どもの姿を知る機会になると考えた。

これらのことから、本研究においては、学級担任ではな

い養護教諭が、学級活動の時間に学級集団を対象として、描画を用いた子どもの心を育むための取り組みである「お絵かき遊び」を定期的実践した。その成果を報告する。

### II 本研究の目的

本研究は、養護教諭が小学校3年生の1学級を対象に「お絵かき遊び」を定期的実施する中で、第1に養護教諭がこの活動を実施することの有効性を明確にすること、第2に、「お絵かき遊び」の効果の検証と方法の吟味をすることを目的とする。

第1の目的、養護教諭が学級に出向き「お絵かき遊び」を実施することが有効であるかを検証するため、次の4点について検討する。

- ①潜在的に支援を必要としている子どもとの関係をつくらることができるのか
- ②学級担任と共に児童理解を深め、支援を行うことができるか
- ③保健室でかかわりをもつ課題のある子どもに対して、何らかの影響があるか
- ④養護教諭が学級で行う保健指導の活動内容としての可能性を探る

そして、第2の目的、「お絵かき遊び」の実践によって得られた成果の確認と、実践法の吟味のため、次の3点を検証する。

- ⑤子どもにとってどのような時間だったのか
- ⑥学級集団の様子の変化
- ⑦「お絵かき遊び」を朝と帰る前の学活に実施し、時間帯の違いがどのような影響を及ぼすのか

1) 名張市立つつじが丘小学校

2) 名張市立百合が丘小学校

3) 三重大学教育学部附属教育実践総合センター

### III 方法

- (1) 対象 小学校3年生の児童  
(男子18名女子18名 計36名)
- (2) 実施者 養護教諭(学級担任は教室内に同席)
- (3) 実施期間 200X年6月～200X+1年2月  
(8・9月は除く)
- (4) 実施時間・回数  
月曜日の朝学活後の10分間 9回  
金曜日の帰りの学活前の10分間 11回  
このうち同じ週に朝学活と帰りの学活前の2回実施できたのは、6回であった。
- (5) 準備
  - ①準備物
    - ・A4サイズの用紙「今の気分をお絵かきしよう」
    - ・16色のクレパス
  - ②校内体制の整備  
養護教諭が教室へ出向き、定期的に「お絵かき遊び」を実施するにあたっては、その時間保健室が不在になるので、緊急時の対応のため、職員会議で共通理解を図ると共に、保健室前のドアに居場所を明示することで、職員の協力を得た。
- (6) 「お絵かき遊び」実施の手順
  - ①子どもたちは着席し、閉眼して心を落ち着け、1分間程度深呼吸する
  - ②「今、ここで」感じている気分に着目し、思うがまま自由に描く
  - ③可能であれば描画したものに題名をつけたり、物語を作ったりする
  - ④描いた作品と自分の気持ちとを比較し、どの程度ぴったりした感覚があるのかを書き入れる
- (7) 「お絵かき遊び」実施上の留意点  
「お絵かき遊び」を始める際に、実施者は子どもたちへ大事なこととして次の4つのことを伝えた。①自由に描くこと(上手に描く必要はない)、②作品は大切に扱うこと、③描きたくない時は、描かなくてもよいこと、④時間を守ることである。なお、具体的な教示法は岡田・松本(2007)を参照されたい。
- (8) 感想の聴取  
学期毎に「ふりかえりシート」を作成し、子ども達に感想を聞く。
- (9) 担任からの情報の聴取  
担任から「学級での児童の様子」を聴取する。「お絵かき遊び」実施前、実施後にチェックリストを使用し、子どもの様子を比較する。感想を随時、聞き取る。
- (10) スーパーバイズ・事例検討  
「お絵かき遊び」開発者の1人である、岡田より定期的に指導を受け、「お絵かき遊び」の取り組みの実態や、

気になる子どもの心の理解についてスーパーバイズを受ける。また、実施期間の半ばには担任を交えて事例検討会を持った。

### IV 実施の結果と考察

#### 1. 「お絵かき遊び」実施時の子どもたち全体の様子

子どもたちの様子は、どの子どもも「お絵かき遊び」に積極的、すすんで取り組む姿が見られた。描いている間に、その絵のお話を作りながら描く子がいたり、その話を養護教諭や友だちに伝え、会話と絵を楽しみながら過ごしている子が多かった。実施の時間に、突発的な保健室の業務のため、遅れて教室へ向かう時は、教室から廊下に顔を出して、養護教諭が来るのを待つ子がいるなど、お絵かきの時間を楽しみにして待つ様子が伺えた。

反面、「お絵かき遊び」の前の時間に教室でトラブルがあったり、何か特別なできごとがあったりした時には、養護教諭には何がおこったのか、また、子どもたちの心情が掴めずに戸惑うこともあった。

#### 2. 養護教諭が「お絵かき遊び」をすることの有効性

##### (1) 潜在的に支援を必要としている子どもとの関係作り

この学級には、それまで養護教諭とのかかわりがなかったが、潜在的に支援を必要としていると思われたA男がいた。A男は、まばたきや咳払いのチックがある子どもで、様子が気になると担任から相談を受けていた。筆者は、養護教諭としてA男に何か支援できることはないかと思っていた。A男の座席は、担任の配慮でいつも最前列にあって、養護教諭が教室へ出向いた時は、必ずA男に声をかけた。すると、徐々にA男も描いた絵を養護教諭に見せながら、内容を話して聞かせてくれるなど、養護教諭はAとの接点を持てるようになった。A男の描く絵は、棒人間が殺し合いをして血を流していたり、天国と天国から落ちる人がくり返し描かれていて、A男の心の葛藤が表現されていた。(描画1)養護教諭は、A男が描く絵を見て、チック症状の背後にあるA男の不安定さが、理解できるようになった。2学期のある日、それまでは保健室に来ることのなかったA男が、休み時間に1人で保健室へ来て、自分から「保健室でもお絵かきしたい」と言った。A男は、教室での友達とのトラブルからくるイライラを絵に表し(描画2)、養護教諭に自分の思いを話すと、その後は落ち着いて自分から教室へ戻ることができた。その後も、A男は月に1、2回教室で何かトラブルがあった時に、自分の感情をコントロールするための場所として、保健室を利用するようになり、養護教諭とかかわりをもつようになった。

##### (2) 学級担任との連携

「お絵かき遊び」の時間、学級担任は教室に同席し、

絵を描く子どもの様子を観察しながら声をかけたり、子どもが絵について語る話に耳を傾けたりしていた。「お絵かき遊び」は、普段教室では見せない子どもの素顔が見えることもあるので、子どもと一緒に「お絵かき遊び」の時間を共有することは、担任にとっても子どもの心理的理解に役立つものだった。

また、「お絵かき遊び」の中で気付いた子どもの様子や、休み時間などに保健室でかかわりをもった子について、養護教諭と学級担任との情報の共有や交流がスムーズにできたため、連携して子どもの心理的支援を行うことができた。

### (3) 保健室でかかわりをもつ課題のある子どもへの影響

「お絵かき遊び」を実施した学級には、1年生時より体調不良を訴える時や、友達とトラブルがあった時などに、頻繁に保健室へ来室していたB子がいた。

養護教諭が「お絵かき遊び」のために3年生の教室へ出向くことになった時、B子はとても喜び、養護教諭を迎えてくれた。B子は不器用な面を持つ子であり、場面での状況が把握できず、友達関係をうまくつくれないう課題をもっていた。養護教諭が教室へ行くと、B子は「お絵かき遊び」の準備を手伝ってくれたり、学級の友達に自分と養護教諭のかかわりを話したりした。B子の描く絵は、座席が近い友達の真似をすることもあったが、友達とのトラブルにより不満を感じている時には、その不満を絵に表すこともあった。(描画3)取り組みを続けるうちに、B子は教室で養護教諭を媒介におしゃべりしたことをきっかけに一緒に行動する友達ができ、休み時間にはその友達と2人で保健室へ来るようになった。そして、徐々にB子は、保健室に来て、友人関係について不満を言うことが少なくなった。養護教諭は、教室でのB子の姿を見ることができ、場が読めずに友達とのトラブルが起こる様子や、それに対しB子がトラブルを他者のせいと認識していることがわかった。このような、学級内でのB子の行動面や心理面について理解が深まり、保健室へ来室した際にはそれらを踏まえて継続的な支援を行った。

### (4) 養護教諭が学級で行う保健指導としての可能性

児童の心身の健康の保持増進に関する指導については、学級担任と養護教諭がそれぞれの特質に応じて適切に行うように、学習指導要領に示されている。学級担任と養護教諭が、個々の児童の日常的な健康課題を多面的・多角的に捉え、計画的・継続的な保健指導が行われることの重要性も、認識されている。

「お絵かき遊び」は、児童の抱える心理的課題の早期発見を促す可能性をもつ。また先述した通り、学級担任と養護教諭との連携により、学級担任が児童の心理的課題を把握し、養護教諭も含めた組織的な指導・支援体制を整えることができる。養護教諭が学級に出向き、「お

絵かき遊び」の取り組みを実施することは、児童の心身の健康保持増進に関する保健指導内容として、位置付けられると考える。その上で、「お絵かき遊び」を継続的に実施することは、児童の心理的課題を捉え、学級担任が広い視野に立った学級経営を行うために役立ち、養護教諭にとっても保健室で行う心理的支援に有効であると考える。

## 3. 「お絵かき遊び」の実践によって得られた成果と実施法の吟味

### (1) 取り組みの様子

学級全体の様子としては、よるこんで描く姿が見受けられたが、実施直前に教室で何かのトラブルがあった日などは、すすんで描こうとする子と、なかなか描けない子の差が激しい時もあった。また、教室の座席の関係で、座席の近い子ども同士がかかわりあって描画するため、子どもの表現にそれが反映されることもあった。「お絵かき遊び」では、可能であれば、絵に題やお話をつけるように促したが、10分間の枠では子どもたちは絵を描くことに精一杯で、題やお話を考えることは難しい様子が伺えた。また、「お絵かき遊び」を行う時間の違いによって、取り組んでいる子どもの雰囲気も異なった。これについては、後で検討する。

### (2) 子どもにとってどのような時間だったのか

#### ① 子どもの感想

各学期末にふりかえりシートを使って「お絵かき遊び」についての感想を聞いた。その結果は図1の通り、どの学期も7～8割の子が「お絵かき遊び」が「とても楽しかった」と答え、残りの子も「楽しかった」と答えた。

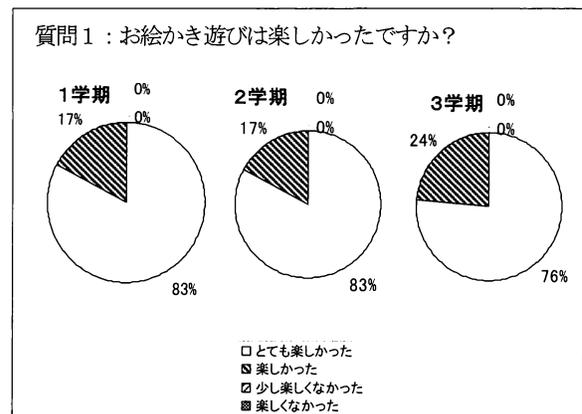


図1 「お絵かき遊び」の感想

3学期末に、「お絵かき遊び」の継続についての希望を調べた。結果は、94%の子どもが「またやりたい」と希望し、「ときどきやりたい」と合わせると、全員が継続を希望した。(図2) 3学期末に「お絵かき遊び」の観想を調べた時にも、「やりたくない」と回答した子はなく、「お絵かき遊び」が子どもたちにとって受け入れられ、楽しみの時間であったことがわかった。

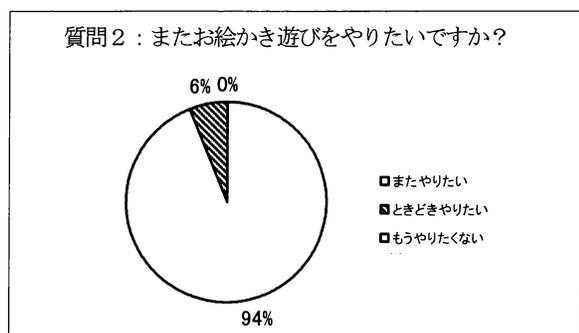


図2 「お絵かき遊び」の継続希望

各学期末のふりかえりシートには、自由記述で感想を記入できるようにした。次のような内容の記述があった。

- ・ちょっといらつくのが すっきりした
  - ・絵をかくのが たのしくなった
  - ・自分の思い通りにかけたから 思いっきりかいたときに、とてもきもちがよかった
  - ・すごく楽しい 自由な気もちになれました
  - ・楽しすぎて 家で絵をかいてしまうようになった
  - ・絵で気もちをあらわせたので よかった
  - ・かいた日もあれば、かかなかった日もあったけど、かいた日は心が落ち着くようなきがした
  - ・お絵かきがとても楽しくなって、すきになりました
  - ・いまの気持ちを絵にかくと なんだかすっきりしてとてもいい気持ちになるので もっとかきたいです
  - ・お絵かき遊びをしていると、自分の気もちがわかるようになってきました
  - ・いつもはかかない今の自分の気もちを、このお絵かき遊びで知りました
  - ・自分の気分を絵に表現するのがおもしろかったです
- 子どもたちの感想としては、肯定的に捉えた記述が多かった。否定的な回答はなく、「お絵かき遊び」を続けるにあたっての希望として、紙の大きさや画材をクレパス以外も使用したいなどがあった。また、描く時間をもっと長くして欲しいや、卒業まで続けて欲しいなどの要望も書かれていた。これらのことから、子どもたちにとって「お絵かき遊び」の時間は、自分を見つめる、自分の感情がわかる、カタルシスを得る時間となり、その手法を家でも取り入れるようになるなど、自分の心をコントロールする方法として認識していることが見て取れる。これらのことは、筆者らが「お絵かき遊び」を開発した目的と、一致していることがわかる。

### (3) 学級集団の変化

#### ①子どもの感想

3学期末には、クラスの様子について、子どもたちの意識がどう変わったかを調査した。

結果は図3の通り、「お絵かき遊び」に取り組んだことでクラスが変わったと意識している子は、29%であった。「変わった」と回答した子に、「どんなふうに変わり

ましたか？」との質問を加えたところ、次のような回答があった。

- ・前より明るいクラスになった
- ・楽しくなった
- ・お絵かき遊びをしている時、みんなニコニコしている
- ・勉強中静かに集中してやるようになって、しゃべる時はいっぱい思いっきりしゃべるようになった
- ・いつも楽しそうだけど、絵を描く時はもっと楽しそう
- ・お絵かき遊びと聞いたら、みんなとてもよろこんでた

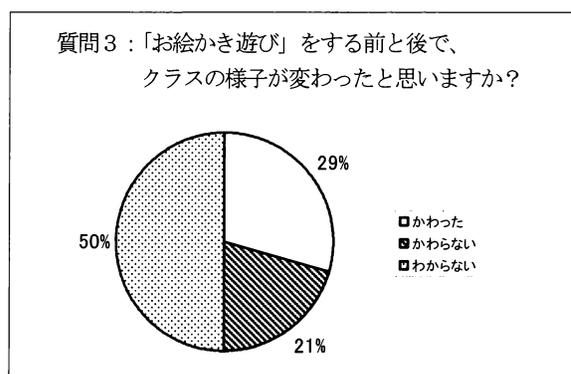


図3 学級集団の変化

#### ②学級担任の感想

学級担任からは、「お絵かき遊び」の取り組みについて、次のような感想があげられた。

- ・とても楽しそうに取り組んでいた
- ・気になる絵を描いている子への配慮ができ、それがうまくいった
- ・描きたい子も描きにくそうにしている子も、自由に絵を描き始めるとのびのびとしているように思えた
- ・何かスッキリしていると思った

①②から、子どもたちが「お絵かき遊び」の時間には自分を自由に表現でき、同じ体験を友達とも共有し、それを認めてくれる教師の存在を感じていることがわかる。このことで、クラスの様子が変わった、活動に規律をもてるようになったと回答し、「お絵かき遊び」が学級の心理・社会面において有効に作用していることが、再確認された。

#### (4)「お絵かき遊び」実施法の吟味－朝夕の比較－

##### ①子どもの感想

本研究以前の「お絵かき遊び」の取り組みでは、朝学活の時間に実践を重ねてきたが、本研究では朝学活の時間と帰りの学活前の時間に実施した。この実施時間の相違を子どもたちがどう感じるか、「描きやすさ感」に違いがあるのかをみるために、2学期末に記入した「ふりかえりシート」で、「朝と帰る前では、どちらがお絵かきしやすかったですか？」と質問した。(図4) 結果、子どもたちは、時間の違いによる描きにくさは特に感じていないようであった。しかし実際には、描かれる絵については内容や色合いに違いが見られる子もいた。

②子どもたちの作品から

「お絵かき遊び」を実施する時間の相違は、子どもたちの認識では特別な差はなかったが、月曜日の朝学活後に実施した場合に描かれる絵には、週末をどのように過ごしたかの内容(描画4)や、眠気やだるさを訴え、学校生活に乗り切れていない反応を見せる子(描画5)など、起床時から登校するまでの家庭での様子を反映するものもあった。

金曜日の帰りの学活前に実施した場合は、その日に起こったできごとや、その時点で友人との関係を反映した内容のものなど、1日をふりかえる意味をもつ絵があった。また、子どもの気持ちが学校から帰宅後の家庭へと移行している様子(描画6)や、帰宅を急ぐ気持ちが表れ、落ち着いて取り組めない子もいた。

これらのことから、子どもたちが「お絵かき遊び」によって気分を切り替え、学習活動への意欲につなげることを目的とするならば、朝の時間に取り組むことが望ましいといえるが、学級の実態や実施者の目的を考慮し、どの時間に実施することが望ましいかは、検討をする必要があると考える。

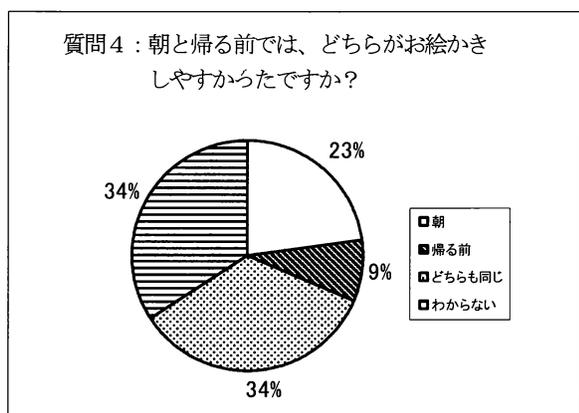


図4 朝夕の取り組みの比較

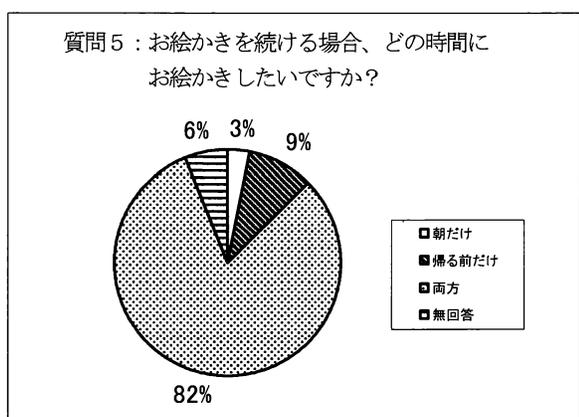


図5 時間帯の希望

4. 実践を通して気付いたこと

(1) 個別的対応の必要性

養護教諭が学級において「お絵かき遊び」をすることは、必然的に全体指導になるが、子どもたちが養護教諭

に対してもつ意識や感情には、さまざまなものがあり、取り組みをすすめる中で、子どもたちはそれぞれの方法で養護教諭に心理的メッセージを送ってきた。例えば子どもたちの中には、「お絵かき遊び」の感想に「楽しかった」と答えたにもかかわらず、2学期最初の時間には用紙に何も描かず白紙で提出した者が4名いた。そこで、その子たちと話し合い、気持ちを確かめる機会を持った。養護教諭は、この「お絵かき遊び」は教師が子どもに押し付けてするものではなく、子どもと一緒に作り上げていくものだと考えていることを伝えたところ、子どもたちはそれぞれ白紙で提出した理由を言ったが、その後2学期も「お絵かき遊び」を積極的に取り組むことができた。これらの子どもたちは、養護教諭に対しても親しみを感じるようになり、行動に変化があった。

このように、学級集団を対象とした指導を行う場合でも、子どもの心理的表現を促す取り組みにおいては、子どもの状態を的確に判断し、個別的対応も行う必要があることを確認した。

(2) スーパーバイズ・事例検討の必要性

実施期間の半ば10月には、岡田が来校し「お絵かき遊び」に取り組む子どもの様子を参観した後、学級担任を交え事例検討会を行った。事前に、担任が気になる子の様子をメモしておき、その子を中心に「お絵かき遊び」で描いた絵を見ながら、学校での様子を交流しアドバイスを受けた。他にも、「お絵かき遊び」の時間を参観した際に子どもが見せた様子や、描いた絵からも心の理解と支援について指導を受け、子どもの理解が深まった。

定期的に継続して「お絵かき遊び」を続ける場合、実施者と子どもの関係が近くなるにつれ、子どもへの観察や配慮に慣れが生じたり、見方に偏りが生じたりすることが考えられるため、第三者からの視点で取り組みを見直していく必要があり、スーパーバイズや共同研究の場をもつことが、重要であると考えられる。

V まとめと今後の課題

学級で子どもの心を育むことを目指し、筆者らは「お絵かき遊び」を開発し、実践を積み重ねている。本研究では、その取り組みを養護教諭が行うことの有効性について検証することと、「お絵かき遊び」の成果の確認及び実施法の吟味を目的とした。前者の目的については、学級担任でない養護教諭がこの活動を実施することにより、子どもにとって養護教諭や保健室の存在が心理的に近くなり、それまで保健室に入室していなかったが支援が必要だと思われた子どもが入室し、学校生活へ適用するため、心理的安心を求める場所として利用するようになったなど、子どもの心の支援の可能性が広がり、十分な意味があった。また、この活動の時間に学級担任には

